
新規テキスト ドキュメント.txt

えにい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新規テキスト ドキュメント .txt

【Nコード】

N7517Y

【作者名】

えにい

【あらすじ】

剣と魔導とマモノとが交じり合う混沌とした世界・・・
そんな適度にブッソウな大陸に、魔導学校があった。

晴れて今日から入学することになったピカピカ1年生の「つむぎ」
早く一人前の魔導師になることが夢の彼女の周りには、頭痛のタネの幼なじみや、クールなルームメイトや、ちよつと古風な委員長など、個性あふれる(?)クラスメイトがいっぱい。

彼女は無事卒業して、リッパな魔導師になることができるのか？

そして、ある課外実習の途中、世界の根底をゆるがすような秘密を知ってしまい……？

王道のようなそうでもないような、ファンタジー学園物です。
シリアスもギャグも恋愛も青春もバトルも、全部こった煮になる予定
どちらかと言うと少女向けライトノベル系……かも

この文は、別ブログで掲載したものと重複投稿です

プロローグ 『魔導学校へようこそーいかにして4人は出会ったか』

遠い音楽が聞こえる。

ずうつと昔に聞いた、優しい歌だ。

まだお父さんもお母さんも側にいて、何一つ不安なことなんてなかったあの頃のか

「……朝？」

チチチと鳴く小鳥の声が窓の外から聞こえ、ぼくはゆっくりと体を起こした。まだ半分夢見心地のままの頬を、涙が伝う。

シャツと黄色いチエックのカーテンを引くと、白い街並みが飛び込んできた。

輝くような朝の空気の中、扇状に広がった家々が朝日を反射してきらめいている。

そして何より目を引くのが、この街の中心にそびえる大きな建物。今日から通うことになる魔導学校だ。

まるでお城のように湖のふちにそびえたつ学校のとっぺんには、大きな鐘が吊り下げられ左右にゆらり振られて街中に朝を告げている。

そして同時にぼくの遅刻も告げているのだった。

しばらくベッドの上でぼんやりとしていたけど、外から響くソウゴンな鐘の音に、ひっぱたかれたように意識を戻す。

「う、わっ、寝坊！」

慌ててベッドを飛び降りて、パジャマを脱いで服に着替え始める。鏡の前にたち、あっちこっちに跳ねている金色の髪をムリヤリなでつけ、赤いヘッドホンをガポツとはめる。

最後に青い目に目やにがついてないか確認してから、ニコツと笑う。うん！ これでよしっ

年頃のオンナノコの支度がわずか3分で済んでしまうのはちょっとばかり首をひねるところだけど……とにかく今は遅刻しないことが第一だっ！

緑のナナメ掛けカバンの中に必要書類をつめこんで、ぼくは元氣よく家を飛び出した。

「いつてきまーす！！」

プロローグ『魔導学校へようこそ！』いかにして4人は出会ったか

ところが、玄関を1歩出るか出ないかというところでそれに気がついた。

地面に映る影の形が、やけに不自然に歪んでいるんだ。ってまさか

「つむぎいいい つー！」

街中に響き渡るんじゃないかってくらいの大声を耳に、ぼくは勢いよく振り仰いだ。

眩しい朝日をバツクに飛び降りてきた「そいつ」をすんでのころでかわし、そこらへんに飾ってあった鉢植えを両手で投げつける。ドゴオツとかそんな感じの音をたてて、鉢植えは見事ピンクの髪の毛をしとめていた。

「こらあかなで！ いい加減出がけに襲ってくるのを止める、毎朝生きた心地がしないんだから！」

倒れ込んでいたそいつは、ブザマに倒れた体勢から無駄なほど優雅に身を起こした。……頭に鉢植えを乗せたまま。

ピンク色の髪の毛に水色の瞳、ニヤニヤと笑う口元が実に腹立たしいコイツは「かなで」

なんの因果か昔からぼくに付きまとう変な男の子、だ。ちなみに付きまとうと言う意味に恋愛的な意味は微塵も含まれていない。どういうことかと言うと

「勝負だ！」

こちらに指をビシッとつきたて言うかなでに、ガクリと肩を落としてため息をひとつ。

そう、コイツは何かとあるとすぐに勝負だバトルだと絡んでくるのだ。一方的なライバルというのか、とにかく今のぼくにとっては邪魔者以外の何者でもなかった。

できるだけ軽くあしらってしまおうと、手をヒラヒラと振って追いつく。

「悪いけどそんなヒマないよ。これから入学式なんだか……ら……」

「？」

つてえ！

ここでハッと気付いたぼくは、キョトンとしたかなでの頭を一つはたいて、その襟元を掴んで走り出した。

「キミもだろー！！」

「ぐえっ！」

そう、腹立たしいことにコイツも入学試験をパスし晴れて本日より魔導学校1年生のはずなのだ。

「それが何でこんな所でのんびりしてるのさっ」

「いやあ、朝駆けの奇襲はオレのライフワークだから。」

「信じらんないっ、ばかばかばかなで！」

ぼくは半分泣き声になりながらも走る。ようやく見えてきた学校の門は、すでに閉まり始めている！

「ちょ、つむぎ、擦れてる擦れてる！ オレけずれる下ろしになる」

「だったら自分で走れっ」

業をにやしたぼくは、かなでの襟元を思いっきり前方に投げつける。そしてその場にザッと止まり、右手をまっすぐ上に伸ばす。

「/ t a c t !」

そう呼び出しの呪文をかけると、光の粒子が手の中にあつまっていき、次の瞬間にはタクトを握っていた。

そして左から右へとふり『リズム』を刻む。空気中の密度があつ

まっつていき、限界点に達したとき、ぼくは魔法を発動させた。

「エアブラスト！」

タクトの先から圧縮された空気が発射され、前を転げそうになっ
ていたかなでの背中に命中する。

「おわあ〜〜！」

後ろから背中を押された状態のかなでは、とうてい生身では出せ
ないようなスピードで吹っ飛び、敷地内に転がり込んだ。

「つむぎい〜、はやくはやく」

「わかつてるよ！」

そしてぼくも力の限り走り、かなでが押さえてくれている門を本
当にギリギリのところですり抜けた。

転げるように校庭に倒れこんだぼくたちは、力なくハイタッチす
る。

「セーフ」

「間に合わないかと思ったあ」

くやしけど、なんだかんだいってかなでとのコンビネーション
は悪くないんだよね……幼なじみだから。

「さてと、さっさと行こう。今ならまだ間に合うよね。」

「へ〜い」

やる気のない返事を背中に、ぼくたちは入学式がとりおこなわれ
ると聞いている講堂に向かう。

今まで外から見つめるだけだった学校は、想像以上に大きかった。
まるで小さい子のようにあちこちをキョロキョロと見回してしまう。

「みてみて！ここ大聖堂だよ。ほらてっぺんに鐘がある。」

「でっかいな〜、このスケールつむぎも見習った方が良さぞ」

「ちょ、どつという意味だよ」

「ベーツーにー。あ、ほら講堂」

「おお」

かなでが指す方向には、目指す講堂が堂々とそびえ立っていた。

中からはざわざわとたくさんの人が居るようなざわめきが聞こえて

くる。

「式は9時から。今5分前。みんな着席してるだろうから、こっそり入ろう」

「ド派手に空から入場とかなし？」

「なし！」

本当にやりかねないかなでに釘をさし、ぼくはそっと重たい金属の扉を開けかける。すると

「ん？ なに？」

後ろからかなでがツンツンと服のすそをひっぱる。振り返るとフシギそうな顔がこちらを見返していた。

「オレじゃないよ」

「うそ。だっていま現に」

と、ここでようやく気づいた。かなでとの間に小さな女の子が居たんだ。紫色のロングヘアが綺麗な、オッドアイの子がぼくの服をひっぱっていた。

「キミはえっと？」

まさかこの子も新入生……じゃあないよね。どう見たって5、6歳だ。あ、もしかして新入生の家族でついで来たとか？

「迷子？ お母さん一緒に探してあげようか」

「いや、つむぎ。その子……。」

そういつて腕に抱えると、その大きな眼差しで見つめられた後、とんでもないしゃがれ声が返ってきた。

「ふうむ、ワシを見抜けぬとは、なかなか鈍いのう、おぬし」

「え」

その愛らしい外見とはどう考えてもマッチしないそのしゃべり方に、ぼくの脳は完全に停止してしまう。それにも関わらず女の子は淡々と続けた。

「まあ仕方なかる。それをこれから鍛えてゆくのがワシらの指名じやからのう。どれ、他の魔導師のタマゴたちにも挨拶しないこうではないか。」

ぴよいつと腕から降りた彼女は、スタスタと扉の前に行き、右手をあてる。

「破ッ！」

気合の一言と共にすさまじい轟音がして、扉が内側にバターンと開く。えっと、それ……外開きじゃなかったっけ。

女の子(?)は、中に居た数百人もの新入生の注目をあびながら壇上にあがり、音声拡声魔導器の前に立った。

【えー、生徒諸君。ようこそニキ魔導学校へ。ワシが校長のニキ・インゴットじゃ】

会場のどよめきが一瞬にして静まり返る。そりゃそうだ、ぼくだってそうだ。

「……ぼく、何を信じたらいいのかわからなくなってきたよ。」

「つむぎはそれでいいんじゃないやねー、ダイジョブダイジョブ」

テキストにそう流すかなでの後を追ってぼくも普通に席に座る。

当然のことながらみんな校長のインパクトにおされて、遅刻してきたばかりのことなんかお構いなしだったからだ。

校長インパクトの後には実に平和に式は進んでいった。

先生たちの軽い挨拶と自己紹介、これからの心構えについて、在校生代表からの歓迎の言葉。そして新入生の答辞。

ぼくたちの代表として挨拶をしたのは、ひびきという黒髪の男の子だった。さすが代表に選ばれるだけあって、堂々としたものだった。ケド。

(え?)

読み終えてまだ拍手が鳴り止まない時に、彼がまっすぐにこちらを見たんだ。いや、見たというよりはニラミつけられたといった方が近いかもしれない。な、なんで?

とまどって目がそらせずに居ると、壇上から降りてきた彼はこちらへとツカツカ歩み寄ってきた。長い髪の毛がさらっと揺れる様に、近くにいた女の子が熱っぽい視線を送る……のだけど、ぼくにとっ

てはわけがわからない。

目を白黒させていると、ひびき君はキッと眉根をよせてからビシリとこちらを指差しこう言った。

「貴様がつむぎとか言うヤツか。」

「そ、そうだけど。」

何なんだよつ、いったいぼくが何をしたつていうのさあ〜!!

ギラギラと光る黒い目から逃げ出せず、ひたすら冷や汗を流すだけのこちらを彼は無遠慮に見回す。

「ふん、なんと貧相な魔力だ。これがあの伝説の魔導師メイユールとリセリアたちの娘とは到底おもえんな。」

「!」

そう言われた瞬間、ぼくの頭の芯がすうっと冷えていくのを感じた。

メイユールとリセリア。この街で魔導師を志す者なら知らない人は居ないであろう名前は、ぼくにとって二つの意味を持っていた。尊敬すべき大魔導師としての名前、そしてもう一つは……どこにも居る普通のお父さん、お母さんだと言うこと。そう、ぼくは彼らの間に生まれた一人娘なんだ。

お父さんもお母さんも、とても優秀な音式魔法 世の中の物質すべてに存在するという『リズム』をあやつり、魔法を発動させる者の総称 の使い手だった。その名声は高く、となりの大陸にまで響いていたという。

けれどもそんな人たちの娘であるぼくの魔力といえば、簡単な基本魔法しか使えないおそまつな物だった。絶対的な魔力の量が少なかったんだ。

自分でも気にしていることを言われ、何も言えなくなってしまうほくにひびき君は宣言する。

「いいか！ 天才魔導師の子供らしいが、絶対にお前には負けないからな！」

それだけ言うと、きびすを返して自分の席へと戻っていつてしま

う。一方的なライバル宣言に、どこか脱力してため息をつく。
「かなでに続いて、どうしてこう自称ライバルが増えるんだろう…」
「…」
「んお？ 呼んだ？」
「どう思う？」
「んー？ ごめん、寝てた。」
間の抜けたその返答に、ぼくは再度がくりと肩を落としたのだった。

いったいこれから先の学校生活、どうなっちゃうんだろう。

今年の入学者は100名。各20人ずつの5クラスに分かれることになるみたいだ。

一通りの式が終わったようなので、新入生は新しいクラスへと移動することになった。……のは良いんだけど。

「わぶっ、ちよ、わあぁ〜！！」

一斉に移動しはじめる人の波の中で、流されるままになってしまふ。うう、認めたくないけど、ぼくはその、他の人に比べてちよっぴり背が低くて、思うような方向に進むことができないのだ。

(もっっ！)

ぼくの所属は3組。それには南の扉から出れば近いらしいんだけど、どうにも流されて別の扉から出てしまふ。(腹立たしくも同じクラスだった)かなでともつくにはぐれてしまったし、どうしよう…。

見知らぬ場所で途方にくれているぼくの背中に、声が掛けられた。「ねえあなた。一緒のクラスみたいだし、ついてくる？」

「え？」

振り向くとそこには大・中・小とでも表現できそうな女の子3人組がにこやかにたっていた。わぁ〜どの子も綺麗でおしゃれだなあ。都の方から来た新入生かな。

とにもかくにも、天の助けとばかりにぼくはとびついた。

「ありがとう！ すごく困ってたんだ」

「いいのよ。同級生じゃない」

一番大きなリーダー各つぽい子が、綺麗な金髪をかきあげながらそう言う。友達になれるかな？

「あ、ぼくつむぎ！ キミたちは？」

「それはクラスについてからにしましょうよ」

新緑のおかつぱ頭の中ちゃん（仮）が、そういつてぼくの腕をとる。そう言うものなの？ まあ確かに早く教室に行かないと怒られちゃうもんね。

「そいじゃいこっか」

鮮やかな桃色の髪の小ちゃん（仮）が反対側の腕にも飛びつく。

（あ、ちなみに小ちゃんとは言っても残念なことにぼくより背はほんの少しだけ高い……。ぐぬぬ）

なぜか拘束されるような形になってしまった状態で、多少とまどいながらもひきずられていく。

「あ、あのう……？」

なぜだか人目を気にするようにチラチラと周囲を警戒する3人は、駆け足でぼくを一つの教室に連れて行った。

「わっ！」

暗くてほこりっぽくて、どう考えても3組の教室には見えないその場所に放り込まれたぼくは、彼女たちがガラガラと後ろ手に扉を閉めるところを目撃した。

「なにするんだよっ！」

思わずそう抗議して立ち上がろうとすると、小ちゃんがずっと顔を近づけてきた。

「ってゆーかさあ、ウザいよアンタ」

「いつ？」

とーとつにそんなことを言われ、本日何度目か分からないフリーズをしてしまう。なんだろう今日、厄日？

続けざまに大ちゃんがぼくの前髪をグイッと掴んで上を向かせる。
「いたたたた！ 痛い！」

「あなたねえ、この程度の顔でひびき様に気に入られるとか何様？
自重なさいな」

「あぐっ」

ひびき？ ひびきって、さっきのライバル宣言の答辞の人？

床に顔を押し付けられ、苦しくなるもなんとか誤解を解こうとする。
る。

「あんな人しらないよ、勝手に言ってきただけじゃないか！」

「わからないのね……それがどれだけ名誉なことか。」

中ちゃんが暗い目で前に立つ。その手には細めのインクペンが握られていた。述式魔法

！

「入学したばかりで残念でしょうけど、今日にも退学手続きをしないと二度と歩けない体になってしまいかもしれないわよ。」

「な」

述式魔法の特徴である筆記用具の魔具で、空中にスペルを直接書き出す中ちゃん。その魔法展開は、氷。

空中に無数の鋭い氷の塊が出現する。フローズンエッジ（氷の錐）と呼ばれる高等魔法がぼくに狙いを定めていた。

「さあ、どうするの？ ひびき様の前から消える？ それとも串刺しになってみる？」

「……………」

「ぜったいに、やだ！」

お父さん、お母さんみたいになりたくて、小さい頃からあこがれてきた魔導学校を、どうしてこんな人たちのために諦めなきゃいけないんだ。

ムカムカした気持ちを視線に変え、せいっぱいならみつけるようにして、はつきりと言う。

「ぼくは、この学校を卒業して、リッパな魔導師になるんだ！」

「……………そう。残念」

大ちゃんの合図で、氷の槍がぼくへと　　っ

あれえ？　何してるんですかこんなと・こ・で

「　　っ？」

覚悟を決めて目を瞑っていたばかりの耳に、どこか楽しそうな新しい声が聞こえてきた。

目をおそろおそろ開けてみると、いつの間に来たんだろう、教室の扉によりかかるようにして一人の女の子が紫の瞳を歪ませ、ニヤニヤと笑っていた。

彼女はゆっくりと歩み寄ってくると、腕を組んだまま言葉を続ける。

「こんな人の少ない空き教室で、イジメ？　古いなー、実に古典的。

」

「どなた？　何を根拠にそのようなことをおっしゃるのかしら。」
氷の槍はいつの間にか消えていた。どうやらすばやく詠唱キャンセルをしたらしく、あたりにはひんやりとした空気だけが残っていた。

今にも爆笑しそうな女の子は、ゆるやかにウェーブするオレンジ色の長髪をゆらしながらさらに近寄ってくる。

「根拠お？　そんなもんじゃないわよ。ただ　　」

ふところから手のひらサイズの赤い魔具を取り出した彼女は、それをパカッと開けた。

「証拠ならここにあるけど。」

そこにはついさきほどの、まさにぼくが刺し貫かれる寸前の写真がばっちりと写されていた。

「！　映写魔導器か！！」

「うぜえ！　まじうっぜえ！！」

「くっ、行くわよ。」

そそくさと退散した3人組を見送って、女の子はふーっとため息

をついた。

「どこにでも居るのねー、ああいうヤツらつて。ちょっとは個性が出せないもんかしら」

「あの、ありがとう。でもどうしてここに……？」

貸してくれた手に掴まりながらぼくは立ち上がる。うつ、抑え付けられていたからかちよつとふらつく。

「あなた『つむぎ』でしょ？ 答辞の人にケンカふっかけられてた。」

「……そうだけど。」

その切り出し方になんとなく警戒を覚えてしまう。まさかこの人まで「ひびき様あ〜」とか言い出すんじゃないだろうか。

ところが彼女はこんな真相を明かしてくれたのだった。

「アタシの名前はつづり。つづりつつむぎ、似てるでしょ？」

「？」

「出席番号が連番。寮が相部屋なのよ、アタシたち」

「あー！」

意外な事実には驚いていると、つづりちゃんは少しだけ照れくさそうに話してくれる。

「本当は講堂で声をかけるべきだったんだけどね、つむぎったら人ごみに流されて全然違う方いっちゃうし、やっと追いついたとおもったら変な3人組に絡まれてるし。」

「ありがとう……ぼくのためにそんな。」

「ああ、いやそれがね、あんた見つけたのはアタシじゃなくてコイツなんだけど。」

こいつ？ と首をかしげて、つづりちゃんが指し示した入り口を見たぼくは、そこにおなじみのピンク頭があるのに脱力した。

「ばア、だーいじょーぶう？ だった？」

「かなで……。」

「探してたらコイツがいきなり現われてね、教えてくれたんだけど……。」

つづりちゃんも扱いに困っているのか、引きつり笑いでかなでを見やる。

(なんなの、つむぎの彼氏?)

(ち、違う! 単なる腐れ縁!)

空き教室の黒板に鼻歌なんか歌いながらラクガキをはじめると、男は、確かに雰囲気胡散臭かった。

「っていつか、なんで見てたのに入ってたんだよ。」

「そうだ、かなでは入ってくれば3対3、それでなくても男の子なんだから、ちよつとはこちらが有利になったはずなんじゃないの？」

「そう言つと当の本人はへにやりと笑い、でへへなんて声を出す。」

「いやあ、女の子がきゃっきゃウフフしてるところに入ったらまずいっしょー」

「キミに期待したぼくがバカだった……」

「だけどもあ、一役買ってくれたことは事実だよな。」

「一応……ありがとう、かなで。」

「えへへもつと褒めて褒めて、オレ褒められて育つ子。抱きしめてくやさしくそつと」

「いこうか、つづりちゃん」

「アンタら面白いわね」

結局15分遅れで教室に到着したぼくたちは、しよつぱなから怒られるはめになった。

「まったく、初日からこれだなんて、先が思いやられるわね。」

ぼくたち3組の担任、ヒノエ先生は綺麗でスタイル抜群の美人教師だ。先生は笑って腕を組んだ。

「ま、最初からそのくらい元気があるほうが私としては好みだけど、次から注意するように」

「はい」「はい」「へへい」

席につくと、ヒノエ先生がこれからのことについて話し出した。

「さてと、全員そろつたことだし、改めて自己紹介するわ。1年3

組の担任のヒノエよ。よろしくね」

先生がくりと手を返すと、その手から水しぶきが散り、あたりにキラキラとした涼しげな光景がひろがった。クラスのみんなの間から驚きの声が漏れる。

「アナタたちもすぐにこのくらいのことではできるようになるわ。そのためにはまじめに取り組むことが必要だけどね。」

「ねえつづりちゃん。先生はいま何式魔法使ったのかな。」

「さあ、道具は使ってなかったみたいだけど……歌式？」

「すごいなあ、ぼくも頑張ればあれができるようになるのかな。今から楽しみだっ」

「それじゃあこれからこの学校で学んでいくために、一番重要なものを配るわ。」

先生はそういって、横に積んであったダンボールの中から、白い箱を取り出した。前から順番にまわってきたそれはキレイな紅い宝珠で、手にとると適度な重みが伝わってきた。下からは黄色の飾り紐が伸びている。

「それはキーアークと言って、このニキ魔導学校に所属している生徒の証。いわば校章ね。再発行は手間がかかるから失くすんじゃないわよ。」

先生は自分の胸元から似たようなキーアークを取り出し（ただしこちらは透明）ひとなでした。

「出席はすべてこれを私のキーアークにかざすことにより認証されるし、あなたたちがこれから暮らすことになる寮の部屋の鍵にもなります。他にも色々使うから、いつどんな時でも肌身離さず持っているように」

「ずいぶん便利なものがあるんだなあ、これも魔法で作られてるのかな？ キラキラと細かい粒子が中で踊っているところを見ると、魔力が働いているみたいけど……」。

「それじゃあ、みんな。用意してきた書類を出してちょうだい。」
ヒノエ先生の指示通りに、ぼくたちは入学書類一式を机の上に出す。そしてキーアークを並べた紙の上をすべらせると

「わ、わ、わ！」

ペリペリと書類から文字がはがれ、吸い込まれるように宝珠の中へと吸い込まれていく。覗き込むと自分の名前が一瞬中に浮かび上がり、消えていった。

「はい、これで個人登録は終了。簡単でしょ？」

登録が終わると、みんなそれぞれキーアークを自分の持ち物のどこにつけるかでにぎわった。

ぼくはと言うと、いつもつけているヘッドホンにつけることにする。つづりちゃんもは魔具からぶら下げ、かなではベルトにつけていた。

うん、なんだかずっと持ってたみたいにしっくり来る。これから長く使うものだから大切にしなくちゃ。

「それでは続いて今後の授業のことについてだけど」

「はあ、やーっと終わったね。」

一通りの説明が終わり、教科書の山を目の前にしてぼくは思いっきり伸びをする。ああ新しい本って良いな、早く勉強したいよ。

「だーるーいーなー、こんな知識詰め込まなくて良かったって良くね、良くね？」

反対にげっそりとした顔で机にもたれかかっているかなで。コイツはまったく……

「もう、何のために入ったんだ。しっかり勉強しなよ、ぼくは面倒みないからね」

「いやっ、外道！ 無責任！ おにちく！」

「おにちくって何さ、鬼畜でしょ。って誰が鬼だ！」

そっぎゃーぎゃー騒いでいたのがまずかった。教室の前の方から

ある人物が寄ってきて、気づくとぼくの前にスツと立っていたのだ。長い黒髪に同系色のまつすぐな瞳。どこかえらそうに腕を組むその人物は

「貴様ら……何をサルのように騒いでいるのだ。」

「いつ!? ひびき……君」

つい数時間前、ぼくに一方的ライバル宣言をした新入生代表のひびき君だった。え、ここに居るってことは

「まさか、同じクラス？」

「なんだ、不満でもあるのか。」

「いやっ、ないない……ないよ。」

「……その妙な間はなんだ。」

うつうつよりによって同じクラスだなんて、この先どうなっちゃうんだろう。

ところがやきもきしていたぼくに、彼は意外な謝罪をしてきたのだった。

「すまなかったな。彼女たちに絡まれたから遅くなってしまったのだろう？」

「えっ？ 彼女たちってもしかして」

さっきの大中小の3人組のこと？ たぶん『ひびき様ファンクラブ』だと思っあの子たち。

ひびき君は本当に申し訳なさそうにこう続ける。

「許してやってくれ、あの子らは悪い奴ではないのだが、私に近づく者には妙に敏感でな。ケガはなかったか？」

「う、うん。」

「なら良かった。」

やさしく笑うひびき君はとってもミリヨク的だった。たしかにこれだけカッコよかったらファンクラブができるのも頷けるよね。

「確かにあのような目立つ場所で声をかけては迷惑だったろう。言ってしまった後で気がついたのだが遅かったな。」

「うつんっ、全然気にしてないよ！ 良かった、ぼくひびき君に嫌

われてるかと思ってた。」

「私はあくまでライバルとしてお前に宣言しただけだ、クラスメイ
トとしては普通に交流を深めたいと考えている。」

そっか、第一印象はサイアクだったけど、本当は誠実で、ちよっ
と熱いだけの人だったんだね。

なんだか嬉しくなったばくは、にっこり笑って手を差し出した。

「じゃあ友達になろうよ、よろしくひびき君！」

ところが差し出した手はいつまでたっても握り返されることがな
かった。

フシギに思っけて目を開けると、こちらの顔を驚いたようにじつと
見ていたひびき君の顔がみるみる赤くなっていく。

「?」

「らっ、ライバルとそう気安く握手なぞできるかああー!」

一言叫ぶと、そのまま教室を飛び出してしまった。もらった
教科書もおきっぱなしで、どこ行くつもりなんだろう。

「????」

「ありや小学生男子だわ……」

つづりちゃんの何かを悟ったような声を横に、ぼくはひたすら首
を傾げるばかりだった。

食堂で夕食(すっごく色とりどりで豪華だった!)を済ませた後、
寮がある棟に移動したばくとつづりちゃんは、ドアの前でドキドキ
しながらキーークを取り出した。

「キレイな部屋だといいいね……」

「そ、そうね、これから3年間生活するところだからね。」

ちよっぴり古めかしい茶色のドアにキーークをかざすと、スウ
と表面に銀色の光が走った。そしてカチリと音がし、鍵が開く。

軽くきしむドアを押して入ったばくたちを、すばらしい光景が待
っていた。

「わあ……」

真正面に大きくとられた窓から、大きな湖が見えたんだ。

ちょうど夕暮れ時の湖は、水色とピンクがまじりあうような空の色を映していても幻想的だった。

表面にふわふわと漂っている金色の光は、湖の周囲に生えている星屑草からあふれ出た魔力胞子だ。

「ふうん、なかなか良い部屋じゃない、ちょっとオンボロみたいだけど……ね！」

バキイ！ と、建てつけが悪いシャワールームへの扉を開けたつづりちゃんは、中を確認して一言。

「シャワーしかないわ。」

「お風呂はみんな共同でおっきいのが下にあるみたいだよ。」

ロフトに駆け上ったぼくはそう言いながら中に転がり込んだ。

確かにオンボロだけど、ぼくはこの部屋が気に入った。頑丈だし何よりこれまで何人も生徒を受け入れてきた暖かみみたいな物があつたんだ。

ゴロンと向かいのロフトに横になった彼女は、目をつむったまま半分眠そうな声で言う。

「荷解きは明日で良いわねー、準備日で丸一日休みみたいだし。」

「ぼくほとんど荷物ないや。自宅がすぐそこだし」

「ああ、地元進学組だっけ」

そのまましばらく他愛もない話をしていただけで、うとうとし始めたつづりちゃんがこんなことを問いかける。

「ねえ、つむぎはどうして魔導師になりたいと思ったの？」

「……………」

黙りこんでしまったぼくに何かを察したのか、彼女は顔だけをこちらに向けて手をひらひらと振った。

「ごめんごめん、言いたくないんなら別に良いわよ。」

「あ、ううん。そうじゃなくてね、ちょっとビックリされないかなあって思っただけ。」

体を起こして、湖の方を見る。だいぶ時間が経っていたのですっかり日は沈み、星屑草の魔力胞子だけがフワフワと漂っていた。

「ぼくの両親は2年前に仕事で出て行ったきり帰ってこなくてさ。それを探しに行きたくて、魔導師になろうって決めたんだけ。」

「……………」

手がかりは何もないけれど、それでも同じ道に入ればきつとつか

ここでハッと気づいたぼくは、おそろおそろ顔をあげてつづりちゃんの様子をうかがった。いきなりこんな話しちゃって、暗いやつだと思われたんじゃない……

でも彼女は哀れむでも慰めるでもなく、ただニツと微笑んでいた。

「ふうん、いいじゃない、そういうの。」

「あの……引かないの？」

そう尋ねると、つづりちゃんはどうして？ とでも言いたそうな顔でごく自然に返してきた。

「話してくれたってコトはとくにアンタの中では結論がついてる話なんでしょ？ ならアタシがいくら慰めの言葉を吐いたところで意味ないじゃない。それとも何かコメント欲しい？」

「ううんっ、要らない！」

あ、なんだろうこの気持ち。胸のつかえがスツと取れていくような。

今までこの話をすると、みんなぼくを可哀想な子みたいに接して来たんだ。腫れ物みたいな扱いは、せつかく整理した気持ちをまた暗い方へ引き込むようで、正直キライだった。

だからこそ、この彼女の反応はとても新鮮で嬉しいものだったんだ。

「っあダメね。アタシってばすっごい合理的だと自負してるんだけど、その分ヒトの気持ちが分からないってゆーか。」

「ううん、それが良い。つづりちゃんはそのままいて」

バツが悪そうに頭をかくつづりちゃんに、ありのままの気持ちを

伝える。

もしかしたらぼくは、この上なく相性の良いルームメイトに巡り会えたのかもしれない。

しばらくその幸せをかみ締めていたぼくは、パンと一つ手を叩いてこう言う。

「さっ、今度はそつちの番！」

「ええ、アタシい？」

「そーだよ、ぼくだけに話させるのはズルいよ〜？」
にひひと笑いながら、今度はぼくが質問する側に回る。

最初はためらっていたつづりちゃんだけど、しばらくしてどこか照れくさそうに体を起こし、今までとは違った雰囲気ですり始める。
「アタシのはつむぎみたいにリツパなものじゃないの。一つ物語りを聞かせてあげようか。クローゼット村知ってる？」

「ええと……ううん。」

「そう、それだけ知名度の低い田舎村よ。ここから遙か西の方、ほとんど大陸の端っこね。アタシはそこから来たの。」

つづりちゃんは流暢に話を紡ぎ、ぼくを見知らぬ土地クローゼットに引き込んでいく。

……そうか、彼女もまた話の専門家、スペシャリスト述式魔法のタマゴなんだ。

「そこはとても乾いた地。いつどんな時だつてカラカラの風が容赦なく村を襲うわ。朝は凍えるように冷え込み、昼間は容赦なく日が照りつける。それでも住民は決してそこを離れようとはしないの。なぜだか分かる？」

「何か宗教上の理由、とかかなあ？」

「半分当たり。村の近くには古い遺跡と鉱山があつてね、神様が宿ると言われるその鉱山から取れる鉱石は、強い魔力を帯びているの。けれども決してむやみやたらと採掘してはいけないしきたりが村には残っている。」

彼女が語るにつれて、ぼくの頭の中にも明確なイメージが伝わってくる。これこそが述式魔導師の話し方の特徴だ。チカラのある語

りは相手を引き込む魅力を放つ。

「昔からの取り決めによつて、村人は生きていくのに必要なだけ採掘し、ほそぼそとした生活を続けてきた。けれどもある日突然よそからウワサを聞きつけた盗賊団が来て、鉱山が壊れるほどに掘り起こしたのよ。」

「そんな……。」

「戦う手段を持たないクローゼの村人は、ヤツらが来るたびに怯えて隠れていなくてはいけなかった。自分たちの神様が荒らされ、奪われるのを見ているだけしかできなかったわ。でもそんな中、若者たちが名乗りを上げたの。このままじゃいけないってね。」

「……………」

「彼らは手始めに武装することを提案した。今まで採掘に使っていた工具を手に持ち、鉱山の入り口で盗賊団を待ち構えたの。けれども結果は惨敗。敵の中には魔法を使うものが居たから、鉱山で鍛えた力は何の意味もなかったのよ。」

「ぼくはすっかり引き込まれ、物語りに聞き入るように真剣に耳を傾けていた。」

「魔法の強大さを目の当たりにした村の者は、対抗するため本格的な魔導師を育てることにしたわ。そこで選ばれたのは村長の娘だった。」

彼女は小さい頃から空想することが大好きで、ヒマさえあれば周りの人たちに自分の作ったお話を聞かせていた。彼女が一面の花畑を語れば、足元に小さな花が芽吹き、大嵐の話をすればほんの少しだけ風が吹いた。述式魔導師としての才能があったのね。

村の期待を一身に受けた彼女は、無事ニキ魔導師学校に通うことになり、そして……。」

つづりちゃんはんーつと伸びをすると、突然夢から覚めたようにガラリといつものように戻す。

「と、まあ、こんなところ。んー、どうも三人称視点はニガテなのよねえ、練習しなくちゃ。」

「え？ え？」

話の突然の終わりに、ぼくはとまどってこんなことを聞いてしまった。

「その女の子どうしたの？ 無事に魔導師になれたの？」

「はあ？」

しばらくポカンとしていたつづりちゃんは、突然はじかれたように笑い出す。な、なんで？

「あははははっ、アンタねえ、自分で聞いたんでしょ。どうしてアタシが魔導師を目指してるか。」

「うん。」

「その女の子は目の前に居るわよ。アタシよア・タ・シ。無事になれるかどうかはこれから決まるんじゃない。だからこの物語りはここで止まってるの。」

「あ！」

そこでようやく理解したぼくは、自分の理解力のなさにガツカリしてしまふ。普通に架空のお話として聞いてちゃってたよ……タマゴとは言え、述式魔導師の話ナメちゃいけないね。

「ま、長々と話したけどアタシが魔導師を目指すのは自分の故郷を守るためよ。あんなシケた村だけアタシが育った村には違いないし。」

「すぐくrippな理由だよ。自分の村を大切に思ってるんだね。」

「まあね、村のヒーローになれるっていうんなら、悪い気はしないわね。」

ケラケラと笑う彼女に、ぼくはひとつの提案をすることにした。

「ねえっ、つづりちゃん。そのクローゼから来たんならこの街のこととはあんまり知らないでしょ。」

「そう、ねえ。入学試験で来たときは列車の都合で早々に帰っちゃったし……。」

「それならさ、明日は準備日だからこの街を案内してあげるよ！ 自慢じゃないけどぼくは生まれた時からこの街に住んでるんだ。裏

道からおいしいケーキ屋さんまで全部知ってるよ。」

「あら良いわね。これから3年間お世話になる街だもの。少しくらい下見にいかなくちゃ。」

「決まりだね。」

ロフトから乗り出したつづりちゃんは、ニツと笑うとこう言う。

「上手くやっていけそうじゃない？ アタシたち」

「えへへへ、よろしくね」

次の日、よく晴れた青空の下をぼくとつづりちゃんは仲良く歩いていた。

街のメインストリートでもある赤いレンガ敷きの通りは今日もにぎやかで、あちらこちらで活気のある声が飛び交っている。

他の学生もみんな街に繰り出しているのかな。あちこちでキーアークをつけた学生を見かける。その色は赤・青・緑とそれぞれだった。赤が新入生として、他の色は上級生だろうか。

「晴れて良かったね。」

「ホント、いい天気。」

ニキ魔導学校のあるこのレークサイドは、学園都市とも呼ばれる学生の街だ。湖の隣に隣接するように学校が建てられ、その周りを囲むように街並が広がっている。

今ある学校の建物は、元々は貴族のお城だったらしいんだけど、そのこの当主さんが亡くなってから国が買い取って学校にしまったらしい。とは言っても、ぼくが生まれるずっと前の話、300年以上も前の話だ。

「だからこの街は城下町みたいな形をしているんだよ。」

「なるほどねえ」

「へえへ、そうなんだー。オレ初めて知ったー。やりいーつ賢くなつたー、明日には忘れてるけど。」

そろって関心してくれるつづりちゃんとかなで……って

「どうして住民のキミが知らないんだよっ、っていうか何で居る！」
「オレに黙って行っちゃうなんて、つむぎのいけずうけちゃんば〜
チビ〜」

「チビって言うなあ！」
「ドゴオ！」

ぼくにとつて禁句中の禁句を放ったかなでをとび蹴りで沈め、肩を怒らせ歩き出す。

「あら、置いてくの？」

「だってかなでが居るとまともに散策なんてできないよ、いっつもトラブル持ってくるんだもん、そいつ。」

わすれもしない7歳の春、ぼくはお隣さんだったかなでと一緒に
お使いに出かけたのだ。商業区の八百屋さんに行ってカレーの材料
を買ってくるといふ簡単なお使いだったのに……

「それをかなでが寄り道はするわ、学校の生徒にイタズラしてぼく
まで追っかけられるわ、ドブの側溝に足つつ込むわ」

「最後のはつむぎの自業自得じゃなかったっけ。」

「うぐっ」

たしかに、あれは、ぼくの不注意だった、けど。

「さあ〜行こう。案内し倒してやるぜ！」

「あっ」

ぼくが戸惑っている間に、かなでは先に行ってしまう 一つの
間にか取ったぼくのヘッドホンを右手にぶら下げて。

「あああ〜、またアイツのペースに乗せられるうう〜」

「良いんじゃない？ 少なくともアタシは楽しいけどね。ああ言う
男。」

「んなつ、つづりちゃんまさか」

万が一にもしたくない想像をしまつて、ぼくは恐怖におのの
き振り返る。

ところが彼女は至極まじめな顔でこう言つてのけたのだった。

「つむぎとの漫才コンビ、もっと見たいわ。」

「……そう。」

なんかもう、考えるのがめんどくさくなってきた。

諦めたぼくは大人しくピンク頭の後を追うことにするのだった。

「かくな〜でっ、ぼかなで！ ぼくのヘッドホン返せよっ」

「いつつも思うんだけど、これ何が聞こえんの？」

「うるさいかえせーっ」

バツと跳びつき、勝手に頭にはめていたかなでからヘッドホンを取り返す。

背中に飛び乗るような形になったところで、ぼくはふと気づいた。かなでの頭ごしに、道の真ん中で立ち尽くす人がいる。

そこのお店で買ったのだろうか、ベリイソフトクリームを今まさに口に運ぼうとしたまま停止し、ぼたぼたと溶け出した液体が手首を伝って地面に落ちている。こんな陽気のいい日でも昨日と同じカッチリとした黒系の服を着こなす彼は

「ひびきくん？」

呼びかけにも応じず、ポカンと開いたままの口から「あ」とか「

う」だとかの音が漏れてくる。んっ

「あの……アイス、溶けてるよ？」

「おわたあっ!？」

奇妙な叫び声をあげてソフトクリームを放り投げた彼に、悲劇がまっていた。

「あ。」「あー」「あちゃー」

高く放り投げたソフトクリームは、そのまままっすぐ彼の頭の上に落ちてきたんだ。長い黒髪に、薄ピンク色の液体がベトツと着地しゆっくりと流れてゆく。

「こうして冷たく厳しい冬を越え、ようやく雪解けの季節が始まったのです……」

ブツ

神妙にワケの分らないコメントをつぶやくかなでに、ぼくとつづりちゃんは思わず吹き出してしまふ。

その事に気分を悪くしたのか、ひびきくんは眉を寄せてパチンと指を鳴らした。

とたんに水がバケツ一杯分空中に出現し、ひびきくんの髪の毛を包み込みあつという間に汚れを落としてしまふ。すっこいなあ。

「まったく貴様らというヤツは！ 往来でななな、何を破廉恥な…

…」

「ハレンチ……って何が？」

未だかなでの背中に乗つかっているぼくを指して(だつてここでもしないと彼と視線が合わないんだ!)ひびきくんはまたも顔を赤くする。もしかして……赤面症？

「若い男女がそのようにベタバタと ええい、離れんか!! 学生の内の交際は清く正しくからだらう!」

「古い……」

つづりちゃんの呆れたような声を聞きながら、ぼくはようやくかなでの背中から飛び降りる。別になでとはそんなじゃないんだけどな。幼なじみなんだし。ありえないよ。

「えっと、ひびきくんはどうしてここに？」

気を取り直して聞いてみると、彼は鼻をひとつフンとならして腕を組んだ。

「知れたこと。こうして新入生が羽目を外していないかどうか街を見回っているのだ。案の定貴様らのようなヤツらが居たわけだがな

」

「別にアタシたちは悪いことしてないわよ。ただ歩いてただけだしね」

「ねー。あ、ひびきくんも良かったら一緒にどう？」

「んなつ!？」

またもフシギな動きで固まるひびきくんだったけど、一瞬後には普段の冷静さを取り戻そうとしているように咳払いを一つした。

「良いだろう。そのピンクのクラゲ男の監視も含めて同行させてもらおうか。」

「ピンク？ クラゲ？ どこ？」

「貴様のことだ！」

わざとらしく辺りを探しはじめるかなでを見てほくも納得してしまった。ピンクのクラゲか……的を射ているかもしれない。

ともかく、4人で散策することになったぼくたちは歩きながら街の説明をする（かなでは非常に役に立たない情報を提供するばかりだったけど）

「あそこがメリィおばさんがやってる宿屋、その武器屋のおじさんはノザって言うクマみたいな人。あ、それからあっちの魔材屋さんは学校にも納品しているんだ。経営するのはドロシーさんって言つてすごい綺麗な人なんだよ。ウワサじゃ何百年も生きてる魔女なんだつて。」

「その路地を入ったところに店かまえてるのはこの街の子供ならだれもが御用達のイタズラシヨップ、ねずみ花火がおススメ。それからその覗き穴は」

「何だ？ 何が見えるんだ？」

「あつ、ひびきくんそこは」

レンガの壁に丸くあいた穴を、ひびきくんは覗き込む。あああ……

「ぶつ、ちよつとアンタ自分の顔見てみなさいよ！」

「？ なあつ！？」

笑いをこらえるつづりちゃんが差し出した鏡を見て、彼はまたも絶句する。その目のまわりはパンダのようにくつきりと黒インクがついていた。

この仕掛けはかなでがつくったもので、フシギと覗き込みたくなってしまう心理を利用した悪質なイタズラだった。一時期、街には片目だけパンダのような住人が大量発生したものだ。

「いい加減にしないかーっ！」

「いやいや、オレは別に「覗け」とも何も言っていないぜ。」
「それにしても詳しいのね、アンタたち。」

裏通りからメインストリートに戻ると、つづりちゃんが感心したようにそう言う。ぼくたちはニッコリ笑って自慢げに返す。

「そりゃそうだよ、生まれた時からこの街に住んでるんだもん。」

「オレなんかこの街の地下にめぐらされた秘密経路の地図まで頭に入ってるし。」

「えっ、何それそんなのあったの!?!」

「ウソだけど。」

「こらあ!」

ニヤニヤと笑うかなでは、陽の下に出るとネコのようにつま先をすする。

「あー、目的もなくぶらぶらするのがって楽しいねー。こんなことから『かなた』も連れてくりゃ良かった。」

「かなた?」

聞きなれない名前に首をかしげると、首だけをこちらに向けて説明してくれる。

「うん、オレのルームメイト。別のクラスなんだけど、これがすげーノリが良くてさあ、すげえ気が合うんだよね、今日は何か忙しいとかでこれなかったけど。今度紹介するよ。」

かなでの紹介か……若干不安があるけど、良い人なんだろうな。コイツが懐くのはたいがい悪人じゃないから。

ところが今話を聞いていたひびきくんは、顔をしかめて忠告するようにジロリとかなだを見やる。

「おい、あまり部屋で騒がしくするなよ。」

「お堅いなあ、男子が集まって騒ぐとかムリがあるっすよ、ひびつちゃんも今度一緒にどう?」

「ひびつちゃん!?!」

「あー、ひびきくんの相部屋は誰?」

また周囲の注目を集めてしまいそうな展開になってしまおうと思っ

たばくは、穏便な方向に話を持っていくと話をふる。すると彼はどこか誇らしげに胸を張ってこう答えた。

「私は一人部屋だ。学級委員長だからな。」

「学級？」「委員長。」「ヨッ、ムツツリ委員長！」

「誰がだ！」

脊髓反射的にツツコミを入れるひびきくん。学級委員長だったんだ。

「入学前にヒノエ女史から話があつてな。ぜひにと言われ引き受けたのだ。」

「だからって一人部屋？ えこひいきじゃない？」

「私が決めたことではない。」

ムスツと腕組みをする彼に、ぼくは一つの提案をした。

「あ、じゃあ今度から委員長って呼んでいい？」

「え。」

なぜか戸惑うようなそぶりを見せた彼の肩を、つづりちゃんがニヤリと笑って一つたたく。

「あー、良いわね。ひびきなんてよばれるより、その方がよっぽどしっくりくるわよー。」

「いやっ、私は」

その反対側の肩をたたき、かなでも後押しするように言う。

「委員長！ ムツツリスケベ委員長！」

「だから私はムツツリではない！ 増やすなっ」

がつちりと彼の両脇を固める二人はぼくに視線を向け、コックリとうなずく。なんだろう、そのトドメをさしてやれと言わんばかりの目は。……まあいいか。

正面から見つめると、やっぱり委員長の顔は赤くなる。その顔を見ながら、ぼくは聞いてみた。

「委員長って呼ばれるの、いや？」

「……………好きなように呼べ。」

ガクリと力なくうなだれる彼の後ろで、かなでとつづりちゃんが

ハイタッチをする。

ぼくはやっぱり首を傾げたまま、周りの注目を集めているのを感じていた。

「はあく歩いたねえ。」

「もう足がクタクタよ。でも必要な物が買えてよかったわ。」

真上にあつた太陽がちよつとだけ傾いてきた頃。ぼくたちは少し遅めのランチタイムをとっていた。

メインストリートから一本外れた道にあるおしゃれなカフェテリア。若い夫婦がやっているこの「リュミエール」は最近できたイチオシのお店だ。

今日は晴れているので、お店の外に設置してあるテラスでお食事。新鮮なレタスと熱々のしたたるベーコンを挟んだサンドイッチが絶品なんだよ、うーん美味しいなあ。

「まったく女というもの……どれだけ歩かせれば気が済むのだ。」

「ご機嫌なぼくらはウラハラに、向かいの席でアイスカフェオレをすすっていた委員長は不機嫌そうにそう言う。つづりちゃんはその言葉にムツとしたようで、サラダのフォークを突きつけるように振った。

「いいじゃない、別に荷物持たせてるわけじゃあるまいし。忍耐力のない男はモテないわよ。」

「女のシヨツピングなぞ付き合えと言われても、退屈でたまらん。」

私は食べたらずから帰るからな。」
そう言いながらもパスタをつついてしている様子を見ると、このお店が気に入ったようだ。おいしいもんねえ

しばらくみんな黙々と食べていたけど、ぼくはふと気がついて話題を振る。

「そういえばさ、今度の授業までに4人組のチームを組んでおけて先生言ってたね。」

「ああ、言つてたわね。何をさせるつもりなのかは知らないけど。」
「おそらくは課外実習でのチームだろう。他にも授業内での活動に使うかもしれんがな。」

「ここに居る4人で組まない？」

ぼくがそう言つと、みんなは一斉に食べる手を止めてお互いを見つめた。あれ？ 良い提案だと思つたんだけど……

「つむぎとかなではともかく、委員長が一緒ねえ……。」

「私とお断りだ。特にそのクラゲ男が気に食わん！」

「オレはつむぎが居ればなんだっていいよー。」

と、みんな乗り気ではない様子。うーん、困つたなあ

「ぼくは相性いいと思つただけだなー」

と、何とかみんなを説得しようとしたその時だった。

バツ

「え？ あ！」

「あーっ、置き引きっ！！」

通りを歩いてきた帽子の男が、とつぜん床に置いてあつたつづりちゃんのバツクをひったくるように取つて行つてしまったのだ。

「待ちなさいよこのっ！」

慌てて立ち上がったつづりちゃんの横を、ぼくとかなでがすり抜け、手すりを乗り越えて追いかけ始める。捕まえなきゃ！

けれども犯人はさすがに素早く、すでに10メートルほど間を開けられてしまった。ああもう！

その時、後ろからパチンと音がして、委員長の声が聞こえてきた。

「フン……アイビーフォロー」

植物をあやつる魔法が、そこかしこにある植物たちを一斉に繁らせ通り一帯を覆いつくしてしまう。犯人は驚いてツタに足をとられて戸惑っている。今だ！

「かなでっ！」

「あいよー」

左の建物のベランダからジャンプしたかなでが、飛び降りざまに

帽子の男の背中をけり倒す。バランスを崩したそこに、向かいの建物から跳んだぼくがタクトをかざし、空気中の水分に働きかけるリズムを作りだした。

「フリーズ！」

キーン！

魔法が成功し、ぼくの掛け声と共に男の両手足が氷で固まる。犯人はうめきながら地面に転がった。やった！

「くそお……魔導師かよ。」

「ったく、返しなさいよ！」

「ぐあつ」

追いついたつづりちゃんが男の背中に蹴りを入れる。と、ふとこるに隠し持っていたのかキーアークと魔具が転がり出てきた。

「油断もスキもないわね！」

「観光の街でもあるからね、こういったスリとかは多いんだ。」

慌てて飛んできた自警団の人に犯人を引き渡して、ぼくたちはカフェテリアに戻る。と、委員長は先ほどと同じ体勢でぼくたちを待っていた。

「捕まえたのか。」

「まあね、さつきはありがとう。意外と良いところあるのね。」

「意外とは余計だ。ま、良かったな。」

「そっちの二人も、ありがとね。」

追加で頼んだのか、イチゴのパフェをつついていた委員長は軽く笑う。かなでもへらへらと笑ってるし、ぼくはさつき感じたことに確信を持ち、もう一度言う。

「やっぱり相性いいと思うよ、ぼくたち。」

すると、みんなは互いに見つめあってから、今度は柔らかく微笑んだ。

「そうねえ、それじゃ改めてチームを組んでももらえないかしら。」

「ま、良いだろう。」

「しゃー、そうと決まったら祝杯あげよーぜ、委員長のおごりで」

「何イ!？」

いつの間に頼んだのか、運ばれてきた魔導酒のジョッキを手に、
ぼくたちは大きく声をあげた。

『かんぱーい!』

これが、これから先いくつもの命運を共にする仲間になるとは、
まだこの時のぼくは考えもしなかったんだ。

1章『新しい生活』みんなそれぞれ個性があるワケで』

ぼくは真剣な眼差しで前方を見つめる。

(勝負は一瞬……！)

すでに展開を終え、後はぼくの言葉で解放されるのを待っているタクト。その先端は、さきほどから赤い光が点滅を繰り返していた。見据える先にはいつもどおりヒヨロリと立って構えもしないかなで居る。そのニヤケ顔に向かってぼくは鋭く叫んだ。

「ファイヤー！」

ポウッッ！

言い切るか切らないか、ホントに微妙なそのタイミングで炎の玉が飛び出した。まっすぐに相手に向かって飛んでいく火球は、周囲の空気を巻き込みながら巨大化していく。

このままだと黒こげになるはずだったかなでは、ぼくが魔法を放ったと同時に左手を前に突き出しようやく呼び出しの呪文をかけた。
「/ feather」

光の粒子が急速に集まり、後ろに引き抜いたその手には巨大な羽根ペンが握られてた。間髪入れず素早く空中に呪文^{スベル}を書き、発動させる。

「シールド」

フォンッ

いつものふざけた声とは違う真剣な声で、頑丈な白い半透明の盾がかなでを守るように出現する。ぼくのファイヤーはそこにモロに当たり、細かく霧散し消えていった。

1章『新しい生活』みんなそれぞれ個性があるワケで』

クラスみんながシーンと見守るなか、先に口を開いたのはかなでだった。

「あいかかわらずバカ正直というか、まっすぐというか、直線にしか打てないんだなーつむぎは。そこが良いんだけど。」

「う、うるさいっ。いつかそのナメくさった根性ごと燃やしてやるっ」

「はいはいはい、私は魔法の模擬合戦を見せると言っただけで、口での攻撃まで見せるとは言っていないわよ。」

ヒートアップしそうだったばくたちの間に、苦笑いのヒノ工先生が割りこみ、みんなから一斉に笑い声があがる。そうでもしてくれなかったら仁義なき肉弾戦が始まってたかもしれない。

ヒノ工先生はパンツと一つ手を叩くと、羽根ペンを指して説明を始める。

「このように、今かなでが見せてくれた展開が『記述式魔法』略して述式と呼ばれるスタイルで、一般的な魔導師はこの手を使います。ようは空中にスペルを書き出して魔法を発動させる、シンプルな方法ね。みんなも大半はこれを使ってるんじゃないかしら。」

いまさらだけど説明しておく、ただいま記念すべき授業の一回目『総合魔法』の真っ最中。魔法を使うにあたっての心構えや基礎知識を学ぶ、総合的な時間だ。

そこまでは良かったんだけど……昨日の大捕り物の騒動が学校側にまで伝わってしまったらしく、ヒノ工先生からじきじきにお手本を見せてくれと頼まれてしまったのだ。これがぼくたちが教室で勝負なんかしてる理由。

「述式魔法はお手軽だけど、その分奥が深いわ。付け足すスペルによって威力が変わってきたりするから、多少の文才が必要とされるわね。それでも基本さえ抑えておけば確実に発動できるのが述式のメリットよ。」

次に　とこちらを向いた先生は、少し困ったように眉を寄せる。「つむぎが使って見せたのが『音楽式魔法』と呼ばれる方法なんだ

けど……ちょっと私には説明が難しいわね。もう一度ゆっくりやってみてくれる？」

「あ、はい。えっと、まず周りの音をよく聞くんです。」
世の中に存在しているモノには全部、音とリズムがある。

たとえば傍に立っているヒノエ先生からは、血液や体の細胞とか色々な音が混ざり合い一つのメロディを奏でている。こういった人間なんかは複雑なので、ぼくの音式魔法では爆発させたり凍らせたリといったことはできない。……したくもないけど。

代わりに空気中の水分や、地面の土などのリズムはとても単純なので、これらをあやつり魔法を使うのだ。

「たいていは流れる音の中に決まったリズムがあるんです。ぼくはそのリズムに向けてタクトで指揮をしてあげる、するとその物質の方向性が変わって、性質を変えたり、形を変えたりと言ったことが可能になります。」

そういつて空気のリズムを指揮すると、緩やかな風が教室内に流れ始めた。

「これはちょっと特殊な方式ね。つむぎが言っていた『モノの音を聞く』が出来るようになるためには訓練された耳が必要とされているわ。」

戻っていいわよ、と指示を出されたばかりは、一番前に座っていた委員長とつづりちゃんの隣に戻る。先生は黒板に向かって板書を始めた。

「述式、音式、歌式、色式などスタイルは魔導師の数だけあるわ。自分がどれを使うかは、これから色々な方法を試してみて自分に合った物を見つけていくことが大切よ。わかった？」

はい、と返事をしたみんなを見回し、ヒノエ先生は一つ宿題を出した。

「それでは明日の授業までに、初心者の子は同じチームのメンバーに協力してもらって、様々な方法を予習をしてくること。これからの授業内でそれぞれについて指導していくから、今すぐに決めるこ

とは無いけど、何事もやってみることが大事だからね。」

タイミングよくチャイムが鳴って授業が終わる。

ニキ魔導学校の授業は朝8時から午後の4時までが基本だ。その後は練習場にこもって自主練習しても良いし、図書館で勉強しても良い。街に繰り出すもよし。門限の9時までには寮に戻れば何をすることも自由なんだそうだ。

けれども宿題を出されたとあってはさすがに街へフラフラと遊びに行く人は居ないようだった。クラスのみんなはチームで固まり、それぞれの段階を確認し出す。

ぼくたちも例外ではなく、話し合う事となった。が

「その前に確認したいんだけど。アタシたちの組、一人足りなくな
い？」

そう、他のクラスは20人ずつなのに、ぼくたちの3組だけ19人しか居なかったのだ。……どうなってるんだろう？

辺りをキョロキョロして余ってる人が居ないかどうか探していたぼくたちに、委員長が淡々と告げる。

「その点については昨晚確認を取った。なんでも家庭の事情で一人来れていないらしい。その生徒が着き次第、自動的に私たちの組に割り振られる事となるな。」

「そうなのかー、女の子だと良いね委員長」

「ばっ、どうでも良い！」

頭に腕を乗っけるかなでを払いのけ、委員長はオホンと咳払いをする。

「さっさと宿題を片付けるぞ。とは言え私たちは既にそれぞれスタイルを確立している。今さら何式かを模索する必要など無いと思う
が」

「ぼくが音式でしょ、かなでが述式で、つづりちゃんも述式。……
だよな？」

「そうよ。アタシの魔具はコレ」

つづりちゃんはポケットからあの赤い魔具を取り出す。改めてみてみると、手のひらサイズの箱のようで、とても述式使いの筆記用具には見えないけど……。

「ほう、ずいぶんとめずらしい物を使うのだな。」

「委員長、知ってるの？」

興味を引かれたらしい委員長が、つづりちゃんの魔具をまじまじと見つめる。

「これは『ケータイ』と呼ばれるものでな。古代の遺産を模して少し前に開発された魔具らしい。私も実物を見るのは初めてだ。」

「ちょーつとコレを扱うにはコツが居るから、あんまり流行らなかつたらしいわよ。良い？」

パカッと魔具を開いたつづりちゃんは、何やら下に並んでいるボタンを猛烈な勢いで連打し始めた。ゆ、指が見えない……。

「と、彼は文字通り冷水を浴びせられたのであった。」

彼女が打ち込んでいくたびに、上画面に文字が羅列されていく。またそれと同時に魔法展開する時の光が『ケータイ』を取り囲み回り始めた。

「コールド！」

そして最後のボタンをピツと押すと、かなでの上空に氷水が出現し、バシヤアアと頭から浴びせられたのだった。

「ぎゃあー、ひでえよつづちん。風ー邪ーひーくー」

「大丈夫よ、アンタ馬鹿でしょ」

「なるほど。そうだった」

ぷるぷるっと犬のように頭を振るかなでに向けて、つづりちゃんは乾燥の魔法をかける。今まで述式って言うってペンで記述する方法しか知らなかったけど、こんな方法もあるんだなあ

「形式はどうであれ、文章を表現できるならそれは述式魔法の括りになるからな。」

「あれ、でもそれって映像も取れるんだよね？ 映式じゃないんだ。」

例の3人組から助けしてくれた時は、映写魔導器でもあったはずだ。そう聞くとつづりちゃんはおくをカシャッと撮って見せてくれた。「ケータイはムダに機能がついててね、たしかに映像も撮れるけどアタシは述式の方が性にあってるのよ。」

「ふーん。」

あれ、それじゃあ と振り向いたおくは、興味深げにケータイを見つめていた彼に問う。

「委員長は何式？」

確か昨日は指を鳴らして魔法を発動させてたけど、いったい何式なんだろう。

その問いかけに委員長はハア？ と、言った感じで顔をゆがめた。「気づかなかったのか。」

「む、何がさ。」

「貴様と同じだ。音式魔法。」

その答えに一瞬ポカンとしたおくは、ハッと我に返り叫んだ。

「えええ！？ 嘘だ！」

「嘘について何になる……。」

「だって何の音楽関係の魔具も使ってないし、ましてやリズムに働きかけてなかったじゃないか！」

おくが苦労してリズムを操っていると云うのに、それを補助である魔具を使わない指パッチン一つで！？

「ずるい！」

「仕方ないだろう、色々試してこれが一番性に合ったのだから。リズムなど指の動き一つでどうとでもなる。魔具などいらん。」

「う~~~~っ」

色々試したってことは、どんな方式でも扱えるってことだ。つまり才能あふれる、エリート……

「おい、何を俯いている。」

「委員長なんか嫌いだー！」

「なあ！？」

うわーんと泣き出すぼくに、彼はあたふたと慌て始める。

よ、世の中には、どんなに苦勞したって、全然発動しない人だっているのに、神様なんて不公平だっ

「き、嫌い……キライだと……。」

「まあまあ、つむぎには音式が一番合ってるって。述式試して暴発したり、色式試して物体×作り出したりするからね。」

「ぼくを慰めたいのかけなしたいのかどっちなんだよ！」

ドゴオ！

「へぶっ」

調子にのって抱きついてこようとすかなでに蹴りを一発いれて、ぼくはつづりちゃんに泣き付く。どーせぼくには才能なんてないよっ「にぎやかねえ、退屈しないわホント。」
のんきにそう言う声が、ぼくたちの様子を的確に表していた。

ぼくたちが主に寝泊りなど生活をする学生寮は、本校舎の裏手にあって、上から見るとグルリと湖を半分取り囲むような形をしている。その内訳は上の階層から1年、2年、3年、食事のための大広間と言った感じだ。

一学年100人、全校で300人が暮らしているのだから、その規模はとんでもなく大きい。当然それを世話するだけの人員が必要となるのだけど……この場合は『人』と言うのには少し間違いがあるかもしれない。

「あ、ありがとう」

大広間で夕食をとっていたぼくは、後ろからにゅっと差し出されたお皿をちよつとだけ引きつった笑顔で受け取る。中に大量の魔力を詰め込んだ麻袋は、ぺこりと少しだけ会釈をするとまた別の生徒の給仕へと行ってしまった。

そう、ここでは生身の人間ではなく、無機質な物体に生命を吹き込まれた人工生命体。ホームクルスが働いているのだ。

これはとても高度な魔法で、どうやら校長先生が作り出したみたいなんだけど……うう、やっぱりまだ慣れないなあ。

ホムンクルスたちの形状は実に様々で、たいていは布の袋だったりホウキに手が生えてたりするのだけど、時たま等身大の人形などがあって本物の人間と見間違えてしまう。

確かにちよつとだけブキミではあるけど、ぼくたちのために文句も言わず黙々と働いてくれるその姿はなんだか感慨深いものがある。だから素直にお礼を言ったのだけど、少し離れたところからクスクス笑うような声が聞こえてきた。

「いやあね、ホムンクルスなんかにお礼を言ったりして。なんてお間抜けなのかしら。」

「だっさー、ただの袋に頭下げちゃってるよ。」

「恥ずかしい人……。」

(うつ)

そちらを見ると、そこには例のぼくを空き教室でおどそうとした3人組が居た。

できれば係わり合いになりたくなくて、食事のトレーを持って移動する。はあ、放っておけばいつか収まるとは思っけど……なんだかなあ。

「だから心情を表すにはやっぱり一人称が一番的確よ。読者はその視点になって話の中に入り込めるんだから。」

「いやいや、時代は二人称視点だね。確かに使いこなすのは難しいけど、新しい斬新なスタイルが。」

何やら熱い議論を交わしながら大広間に入ってきたのは、つづりちゃんとかなでだった。二人とも迷式魔導師だけあって魔法に関して話は話が合うらしい。

(良いなあ)

ぼくは音式だから、彼らの議論は畑違いだ。

むかし一度だけ述式のまねをして話と魔法をつむいだら、あまりの下手くそさに暴発し、家の壁を吹っ飛ばしてしまった事を思い出す。……ぼくはただ花を咲かせるだけのつもりだったのに。

(あーあ、ぼくって才能ないのかなあ)

考えたくもないそんな思いが浮かんでぼくの頭にこびりついて離れない。

唯一使える音式だって、お父さんとお母さんが丁寧に教えてくれたのにも関わらず、使えるものは簡単な下級のものばかりだ。いったんネガティブな考えになってしまうと、ズルズルと思考が引きずられていくらしかった。

(うー自己嫌悪)

自分の思考にノックダウンされて机に突っ伏していると、後ろから声をかけられる。

「どうした、はいずりまわるナメクジのようだぞ。」

「いいんちょ……。」
ここでそのトドメを刺すか。と、言うタイミングで、今一番会いたくない人がそこにいた。

「キミってば無意識なの。」

「?」

げんなりしながらも隣を空ける。彼は夕飯のトレーを置くとぼくに向かって妙に姿勢を正した。

「つつ、つつつつ……。」

「? どっか痛いのか?」

「違うっ、っ、つむぎ。さっきの話だが」

ああ、と呟いてぼくはつつぷしたままそちらに顔を向ける。

「ごめんごめん、冗談だよ。本気で委員長が嫌いなわけじゃないか

ら。」

「そっ、そうか。」

そっ、むしろ腹立たしいのは才能のない自分なんだ。

「……………」

「おい？」

ぼくはぼんやりと委員長のお皿に取り分けられたケーキを見ながら、問いかけてみる。

「委員長はさー、どうして音式なの。」

「はあ？」

「色んな方式をあつかえるのに、なんで音楽という形式を選んだの。」

文章も、絵も、色んな選択肢を選べるのに、どうしてその中から曲を選んだんだろう。

そう聞くと彼は、しばらく考えたあとフォークを取って食べ始めた。

「忘れた。」

「わすれた!？」

「そうだ、気づいたら音式だったのだ。理由など要らん。」

「そ、そんなのって……。」

言うべき言葉を探し出す前に、彼は淡々と続ける。

「ただ曲を作り出すという作業が好きだっただけかもしれない。たとえ音式しか使えなかったとしても、私は満足だったろうな。」

こちらをチラッとみた委員長は、すぐに視線をそらすとそっけなく聞いてくる。

「貴様はどうだ、今の自分の形式に不満でもあるのか？」

言われて頭の中がスツと整理されていくのを感じる。

「うっん、ぼくは音式が好きだよ。色んな音を聞くのが楽しい。自分だけの曲を奏でられるのがうれしい。」

「ならばそれで良いではないか。何を悩む必要がある。」

そっか、他の形式が使えなかったって、魔力が弱くたって、ぼくはただまっすぐに音式を極めていけばいいだけなんだ。

そりゃ他の形式を上手く使えないのは、ちよっぴり寂しいけど。

その分ぼくは自分のスタイルを貫けばいいんだ!

「お悩み相談室はこれで良いか？」

「うん、ありがと委員長。……ぼく頑張るよ、たとえヘタクソでも一生懸命、勉強するから。」

フツと優しく笑った委員長は、持っていたフォークでリズムを刻み始める。

「確かにお前の魔法は未熟だが、私は好きだ。」

「え？」

「素直で明るくてバカみたいにまっすぐで　とても耳に優しい魔法だ。」

委員長が奏でる曲が流れ始め、広間に居た何人かの音式魔導師が顔を上げ始める。

少しだけ顔が熱くなるのを感じながら、ぼくは口を開いた。

「ぼくも、キミの音が好きだよ。力強くて激しくて、でも綺麗な魔法。」

「あら、何かしら。綺麗な音楽ね。」

白熱した議論を続けていたつづりは、ふとかすかな音を聴いたような気がして顔を上げる。

かすかに魔力を帯びた調べは、聴くものの心をなごませ、癒していく。

うっとり聞き入るつづりとは対照的に、向かいの男は何の感情もあらわさずに小さく呟くだけだった。

「話し紡いで金の糸、調べ奏でて銀の風　」

「それではみんな、予習はしてきたかしら？」

ヒノエ先生がそういうと、みんなはそろっては「い、と返事を返す。その様子に先生はうんうんとうなずいた。

「よしよし、最初のうちはそうじゃなくちゃね。まあこれが1ヶ月後にはサボり始めるヤツが出てくるわけだけだ。」

「こころなしか、かなでの方を見て言っているような気がする。分かる人にはわかるもんなんだね……。」

ところが視線を感じ取ったのか、疑惑の人物は頭の後ろで手を組みながら非常にダルそーにこう言っただけのけたのだった。

「オレちよーまじめよ？ 昨日の夕飯なんか、お魚の骨まで残さず頂いちゃったし。うぐっ」

「かなで……少し黙ろうか。」
べしつと左手でおしゃべりな口をふさぎ、先生に先に進めてくれるように視線を送る。

「じゃあアンケートをとるわね。直感でいいわ、自分がこれに合ってるんじゃないかなーっていう方式に手を上げてくれるかしら。」

先生は順番に方式をあげていく。述式、音式、色式、歌式、映式、その他……。

「やつぱり述式が多いわねえ。」

結果だけ言うとクラスの4分の3は述式に手を上げた。残りの4人のうち、音式がぼくと委員長で、残りの2人が歌式。色式と映式は1人もいなかった。

「これから学んでいくうちに、変化していくかもしれない物だから柔軟に捕えてね。それでは今日の授業の内容ですが」

『絵で見る魔法』をパタンと閉じて、ぼくは机につっぷして寝るかなでの頭をはたいた。

「終わったよ！」

「んー？」

くああ〜と、あくびをしたかなでは、まだぼんやりしていたのか、こんなことを呟いた。

「あーもう終わり？ つむぎ専門科の願書もー出しちゃった？ オレおんなじのがいーなー」

「専門科あ？」

ぼくはびっくりして思わず教科書をしまつ手を止める。専門科っていうのは3年になってからのコース選択の話で、今のぼくたちには全然関係のない話だ。

わけが分からなくて、まだとろんとしている水色の瞳を見つめると、へにやりと笑ったかなではまたずると寝の体勢に入ろうとする。

「っていう夢みてさー、いやーん夢の中までおべんきよしてるとか、オレまつじめー」
「ばか。」

なーんだ、夢か。そうだよ、かなでが急にそんなまじめなことを話すわけないか。きつとどこかで耳に挟んだ話の夢を見たんだろう。

「ほら、さっさと移動するよ。次は講堂で実技なんだから。ほんやりしてたらケガするからね」

「やたー、座学より体動かすほうが好き好きー。」
そう言いつつも一向に立とうとしないかなでの手首を掴んでひっぱる。まったく、また遅刻しちゃうよ！

「はーやーくーっ」
「ぐう」

だー、もう！ いつそ捨てていこうか！

こちらにもたれかかって寝始める男を背負い、ずるずると移動を始める。どうしてぼくはコイツに甘いんだろう。もーっ

「えへへーつむぎー、好きー」

自分より頭1つ半も大きい男を背負っていると、その後ろから言われ、ぎゅーっと抱きしめられる。その瞬間ぼくは掴んでいた手をパツと離し、一人で行くことを決意した。

ゴツと鈍い音をたてて床に落ちたかなでに、ぼくは冷ややかな視線を送る。

「あと2分で始まるからね。サボったら金輪際勉強見てあげないから。」

ガラガラピシヤツと扉を閉めて、ぼくは廊下を歩き出す。

はぁぁ、どうしてかなではあぁなのかな。ちっちゃい頃はむしろぼくがアイツに面倒見てもらってたのに、今じゃすっかりアベコべだ。

確かに生来のナマケモノではあったけど、それでも今よりはしっかりしていたはずだ。

「人間って世話を焼かれすぎると退化するのかな……。」
「どうしたのよ、いきなり。」

講堂で基本的な述式の手順を教えてもらい、各自で練習を始める段階になってぼくはぼそりと呟いた。

「あぁ、かなでのこと？ 確かにアンタにべったりよねー」
「どうにかならないかな、アレ。」

そのアレ呼ばわりされた張本人はと言うと、委員長とペアになって向こうで練習している。炎を出す訓練のはずなのに、風を呼び起こしては委員長の長髪を乱して遊んでいるようだった。

「放っておいたら自立するんじゃないの？ もうそんな年齢でもないでしょ。」

「アイツは別にぼくなんか居なくなつて、ホントは一人で何でもできるんだよ！ なのにやる気ないフリしてるだけなんだ。」

腹立ちまぎれに魔法展開を始めたぼくの述式は、あらぬ方向から飛び出し小さな火花を散らす。つとと、あぶないあぶない。

「それじゃあどうしてアンタは自分から離れないのよ。」
「……わかんない。」

チラツと視線を向けると、タイミングよく目があったかなでニコツと笑ってひらひらと手を振ってくる。ぼくは慌てて顔をそらす。
「アタシには互いに依存しあってるように見えるけど。」

「ええ！？」
「フレイム！」

つづりちゃんは支給されたペンを使い、上手にファイヤーの上位

魔法を発動させてみせる。一直線に放たれた火柱は正面に設置さるた吸引玉に引き寄せられ吸い込まれていった。

ぼくは今の言葉のイミを考えて、ぷるぷると頭を振る。

「ないないないっ、あんなのただの　そう、ペットだよ！　気だるげでやる気のない猫！」

「そう？　ならそういう事にしておいてあげる。」

「フーブリーちゃあくん！」

含み笑いをしながら言う彼女に、ぼくは怖い顔をしてみせる。ぼくがかなでに依存？　ありえないからっ

もやもやした気持ち振り払うように、ぼくは支給されたペンを大きく振りかざす。体中をめぐる魔力を、ペン先一点に流し込むようにして集中！

火系統のシンボルカラーである赤い光がともり、教えられたおりのスペルを空中に描きそして

「ファイヤー！」

ペンを持つ右手を、左手で包むようにして前方に思いっきり押し出す、すると魔法を発動するとき特有の反動と共に、ペンの先から火の玉がポンツと飛び出した。

やっぱり得意である音式よりは劣るけど、それでもリツパなファイヤーだ！

「やった、ああ！？」

ところがへろへろと酔っ払いのように吸引玉に向かっていった炎は、突然方向を変えてあらぬ方向へと行ってしまふ。向かったその先にいたかなでは、ぼくのファイヤーを引き寄せると器用にお手玉するようにもてあそび始めた。

「あははー」

「かつ、返してよ！」

「えー、やーだー。」

「なんでっ！？」

「だっつむぎが初めて述式で成功したファイヤーっしょ？　記念

にとつとこーぜ。へなちよこ具合も含めて。」

「こらあ！」

そう言うとかなでは、持っていた支給ペンで何やら炎展開の魔法を書き出し、右手に持っていたぼくの未熟な火の玉にかぶせる様に魔法を発動させた。

何をするつもりかと目を見張っていると、とつぜん床に置いた火の中から一匹のトカゲが飛び出した。しかもただのトカゲじゃなくて、メラメラと小さく燃えていたんだ！

「サラマンダー（火トカゲ）！？」

「ホムンクルスの真似事で作った擬似的なモノだけどねえ。吸引玉に吸わせるよりこつちのが面白いっしょー。」

そばに寄ってきた委員長が、信じられないといった顔でかなでを指さす。その手は少しだけ震えていた。

「な、な、な……なぜ貴様がそのような高度な魔法を使える……！」

「んー？ 見本ならそこらにいつぱいあるじゃん。見よう見まねでやってみたら案外上手かったねー。」

そう言うってチロチロと炎の舌を出すサラマンダーを手の甲に乗せ、頭を指の腹でなでている。

確かに校長の作ったホムンクルスならいつぱいあるけどさあ。

「んなアホな……。」

顔面ソーハクと言った感じでわなわなと震えだす委員長の肩を、ぼくはなぐさめるようにポンポンと叩く。

「ごめんね、コイツむかしからこうなんだよ……理論も理屈も分かってないクセに、高度な魔法を時たまやらかすんだ。気にしない方が得だと思う。」

魔導師としての天才はいる、悔しいけど。そう言う点で言うとかなでは間違いなくそのタイプだった。

人並み外れた魔力に、独自性あふれる魔法展開。ぼくが自分の少ない魔力にコンプレックスを持つようになったのも、こいつが原因だったりするんだよなー。今はもうこういう特殊な人物だと割り切

ってるけど。

そんなことを思っていると、様子を見に来たつづりちゃんが、今さつき生まれただけの小さな火トカゲを興味深そうに覗き込む。

「触って熱くないわけ？ 火からできてるんでしょ？」

「元々がつむぎが出した威力の低い炎だからねえ。ちよっと加工して触ってもヤケドしないようにした。」

「威力が低いのは余計だよ。」

「あ、でも吹き出す炎はバツチリ熱いから。ほいファイヤープレス。」

ゴオオ

「熱い ー！！」

かなでの号令でカパツと口を開けたサラマンダーは、小さな火を吹き出した。そしてちよつと指を伸ばしかけた委員長の手をちよつぷり焦がす。

慌てて冷却魔法で冷やす彼のとなりから進み出て、ポンとサラマンダーをぼくへと渡しとんでもないことを言った。

「はい、お母さん。」

「んなつ！？」

「つむぎの魔力から生まれたんだから、当然デシヨ。」
う、確かに……そうだけど。

両手を目の高さまで掲げて受け取ったサラマンダーを見つめる。

燃え盛る炎は本当に熱くなくて、ほっこりと暖かい熱の塊を手のひらに乗せているような感じだ。

つぶらな黒い瞳で一心にぼくを見つめ、時おり首をかしげるしぐさが可愛らしい、けど。

「だめだめだめ！ 寮でペットなんか飼っちゃいけないんだよ！」

「あらあら、育児放棄ですか。」

「人聞きの悪いこと言うなっ！」

「じゃーオレが飼おうっど。」

そう言っただけで肩に置くと、サラマンダーは安心しきったよ

うにその上で丸くなり寝始めた。なんだか納得いかないけど……まあ、良いか。

「名前はそうだな、チロチロ燃えてるからチロ！」

「……魔法の腕はともかく、ネーミングセンスは無いみたいね。」
ぼそつとつぶやくつづりちゃんの意見には、おおむね賛成だった。

その日の夕方、ぼくらは特にすることもなかったので夕食の時間まで校内を探検することにした。

メンバーは言いだしっぺのかなでと、面白そうだといってきたつづりちゃん、それからぼくだ。

「あら、委員長は？」

「くだらないって断られてさー、来ないと暴露本出してやるって言ったら殴られた。」

「何やってるんだか……。」

校舎の入り口である、正面玄関の扉を背にしゃがんでいたかなではパツと立ち上がると中に向かって歩き始める。

「そいじゃー行こうか。昔からこの城ん中、探検してみたかったんだよね。」

前にも言った通り、この学校は古い貴族のお城を改造して作った学校だ。たしかに見るからに探検のしごたえがありそうな外見はしている。

かなでの後を追って校舎内に入ったぼくたちは、まず1階部分から探索することにした。

「とは言っても、ここは教室がほとんどだから別に面白いところは無いと思うんだけど……。」

夕暮れ時の独特の斜陽が照らす中、ひとつずつ教室を覗いていく。この時間はみんな自室に戻っているのか人の影はなかった。

そんなことをつぶやいたぼくに、かなでがビシッと指なんか指す。「甘いなつむぎ。探検家としての名が泣くぜ。」

「いつからぼくは探検家になったんだよ。」

その時、廊下のつきあたりにある大きな鏡を調べていたつづりちゃんが、あら、と小さくつぶやく。

「この鏡、動くわよ。扉になってるみたいね。」

「でかしたつづつちゃん！」

ギィ……と、きしむ音をあげて鏡に見せかけた扉を開く。するとそこには地下へと続く薄暗い階段がぼくらを引き込むようにぼりりと口をあけていた。

「な、なかなか雰囲気あるじゃない……。」

「とつにゅー！」

「あ、こらっ」

警戒するぼくとつづりちゃんとは違い、かなでは意気揚々とその中に飛び込んで行った。恐れと言うものを知らないのかアイツはっ！

「あーもう、追わなくちゃっ」

「魔具は出しておいた方がいいわね。」

「うん、ライティング！」

ぼくが魔法をかけると、タクトの先端にぼんやりとした明かりが灯る。

つづりちゃんも同じように光を出し、ぼくらは慎重に階段を下り始めた。

どうやら水はけが悪いらしく、ジメジメとした空気と時おりしたたる水が、否が応でも恐怖心をあおる。

「か、かなでー？」

なでー なでー なでー……

おっかなびつくり出した声が石段に反響して下へと吸い込まれていく。返事は……ない。

「どこまで続いているのかしら。」

「そもそも変だよ、あんなところからこんな階段が伸びてるだなんて……！」

そう叫んだぼくは、前方に扉を見つけて体をこわばらせた。こん

な地下に部屋……？

ギイイ

警戒しながらも開けると、そこには到底常識では考えられない光景があった。

「なっ……」

視界いっぱい広がる夕焼け空と爽やかな風、とがった塔の先が目線と同じ高さにくくつもあるそこは

「屋上……ね。」

「おかしいつて絶対！」

だってぼく達は1階から階段を降りて、絶対地下に居ると思ってたのに、なんで屋上！？

ボーゼンとしていると、今ぼくらが出てきた扉から声が聞こえてきた。

「なんかこの学校は思わぬところに繋がってるっばいねー」

「かなで！」

頭をかきながらフラリと現れたのは、ぼくたちよりも先に下っていったはずのかなでだった。本当に何がどうなってるの……。

あまり物事を深く考えない性質なのか、つづりちゃんは淡々と言う。

「でもこのショートカット、覚えておくと便利そうね。」

「ん、まあそうだけどさあ。」

「たぶんこのワープゾーンはあっちこっちに在ると思うぜえ。オレ地図つくろー」

嬉しそうなかなでだったけど、ぼくはまだ首を傾げていた。いたい誰が作った仕掛けなんだろう？

「？」

しばらく考えあぐねていたぼくは、ふと何かが聞こえたような気がして空を振り返った。いま一瞬、女の子の声が聞こえたような……

「何かしら。」

つづりちゃんも気づいたらしく、フシギそうな顔をして同じ方向を見つめる。と、空のかなたからそれはやってきた。

いゝゝやあああああああ！！

「!?!」

湖の向こうから、まるで虹を描くようにたくさんの色を引き連れた女の子が、まるで魔女のホウキのように巨大な絵筆に乗って飛んでくるっ

勢いを落とさないまま、彼女はまっすぐにこちらへと　！

「どいてくださいいいいいいいいい！！！！」

「っうわー！！」

奇跡的にぼくとつづりちゃんの間数十センチをすり抜けた彼女は、凄まじい轟音をたてながらあるモノに突っ込んだ。

つまり、地面に白紙を広げて今まさに地図を作ろり始めようとした　かなでに。

「う、うわ　っ!?!」

「こりやさすがに死んだかもしれないわね……………」

「かなで！！」

もうもつとケムリが立ち込める中に飛び込んだばくは、凄惨たる光景を覚悟する……………のだけど。

「ごめんなさいごめんなさい！　まさかこんなところに人が居るだなんて思わなかったんです死んじゃダメですっうっ！！」

空からやってきた女の子が、泣き叫んでいるその光景にシラけてしまった。

だって、その女の子のひざに頭を乗せて「でへへへ」なんて笑ってる幼なじみをみたらダレだってそうなると思うんだ。

こちらの白い目を感じたのか、ニヤケ顔のアホはぼくに向かってひらひらと手を振った。

「……………何やってんの。」

「やくとくく、やーらかい。」

「ヘンタイ！」

ぼくが一括すると、ようやく女の子はかなでが無事だったことに気がついたようで、ハツと顔を赤らめる（ちなみにパツと離されたかなでの頭は床にゴチンと激突し、今度こそ動けなくなった）

目の下でキツチリ切りそろえられ、床に流れるつややかな黒い長髪。白い衣装はどこどころにスリットが入っていてキワドイのだけど、彼女のスタイルのよさにとてもマッチしていてフシギと卑猥さは感じさせなかった。

よっぽど恥ずかしがり屋さんなのか、かぶっていた白いベレー帽で口元を隠した女の子はおそろおそろ切り出した。

「あ、あのう……ここってニキ魔導学校ですよね？」

「全然チガウヨ。ここは国の隠密行動部隊N I N J Aの養成施設。」

「えええ！」

とりあえず適当なウソをつくかなでをもう一回沈めてから、ぼくは慌てて弁解した。

「そうだよ！　ここはニキ魔導学校……の屋上だけだね。もしかしてキミは」

シャキッと立ち上がった彼女は、慌てながらも自己紹介をしてくれる。

「は、はいいつ、申し遅れました、このたびこちらの学校に入学させて頂くことになりました『いろは』ですう、どうぞよろしくお願います。」

「例の遅れてきた新入生ね。空からご登場とは派手なことするわね。」

つづりちゃんが淡々とそう呟くと、いろはちゃんはショックを受けたようにパサリと手に持っていた帽子を落とす。

「もしかしてアナタは『遅れてきたヤツなんか気合が足んねーよ、人前に出す前にここらでちょっくら絞めてやるーぜ、あわよくば退学に追い込んでやるか。』とかそう言う女番長的なアレですかひい

いいー!!」

「だっ、だれが女番長よ!」

めずらしく焦るつづりちゃんの話など聞かずに、彼女の暴走……
もとい妄想は加速していく。

「そして傷心のまま学校を去ったいろはは行く当てもなくフラフラ
と街をさまよう羽目になるのですね。あげくの果てに旅賃が尽き娼
館に売られて慰みものになるのです、ひどいです、ひどすぎます」
くっ

わっと泣き出した彼女の扱いに困ったのか、つづりちゃんはぼく
の方を向き肩をすくめて見せた。なんとかしてよ、の視線におそる
おそる近づいて声をかける。

「あ、あの。いろはちゃん?」

「グスツ……はい?」

「なんで泣いてるの?」

「……なんででしたっけ。」

その返答に、後ろの方でするっとズツコける気配がする。ううん
……なかなか強烈なキャラかもしれない。

ようやく落ち着いて来た彼女に向かって、ぼくたちは改めて自己
紹介をする。

「ぼくはつむぎ! キミとおんなじ1年生で、たぶん同じクラスに
なると思うんだ。よろしくね。」

「つづりよ、女番長じゃないから誤解しないでよね。」

「かなでー! 人生たなぼたがモットー」

つむぎさん、つづりさん、かなでさん、と小さく微笑みながら呟
いた彼女は、どこかおっとりした口調で聞いてきた。

「同じクラスとは、奇遇ですねえ。もしかしてわざわざお出迎えに
来てくださったんですか?」

「いや、そういうワケじゃ」

苦笑いして答えるつづりちゃんだったけど、どこかフシギな縁を
感じているようだった。

もしかしたらいろはちゃんに引き合わせるために、この校舎が道をつなげてくれたのかもしれない。なーんてね

そしてぼくはあと一人足りないメンバーのことを言おうとして切り出す。

「それからここに居ないけど、ひびきくんっていう委員長が」「居るぞ。」

後ろの　またもあのフシギな扉から声が出たかと思うと、今まさに話そうとした本人が出てくるところだった。

やっぱりこの学校、生きてる……よね？

「よくここがわかったね？」

「あれだけ派手なものを残せば当然だ。」

そう言っただけで夕焼け空を仰ぐ委員長。確かに、さきほどいろはちゃんが飛んできた際に残した色のカケラが虹のようにまだきらめいていた。

「さてと、貴様がいろはだな？　校長がお呼びだ。ついてこい」

横柄な態度の委員長は、そう言っただけでクイツと扉を指し示す。そんな彼を見て、いろはちゃんはぼくにコソツと耳打ちをした。

（ダレですか）　あの、ちよっぴりかませ犬臭のする人は。）

（ええと、あれも、ぼくたちのクラスメイトで学級委員長。態度はエラソーだけど、悪い人じゃないから安心してね。）

「だれが偉そうなかませ犬だ！」

よっほどの地獄耳なのか（音式魔導師はたいてい耳が良いんだけど）ガアッ！　と、ツッコミを入れる委員長に、ぼくといういろはちゃんはビクツと肩をすばませる。えへへ……笑ってごまかそう。

「良いか、ここは本来立ち入り禁止の場所なのだぞ、今回は見逃してやるからさっさと寮に戻って。さ、校長がお待ちだ。行くぞ」

そう言い残しているいろはちゃんを連れて行く背中を見送って、ぼくたちはそろって顔を見合わせる。

「校長室、ねえ。」

「いいね、いいね、どんな部屋だと思う？」

「やっぱりみんなも興味あるよね？」

とーぜん！ とばかりにうなずいた二人の跡に続いて、ぼくは委員長が消えた扉へと飛び込んだのだった。

「ちょっと、ヘンなところ触らないでよ」

「ぼくじゃないよお、かなで!？」

「オレでもにゃーっす。だいたい身動き取れないのにムチャ言いなさんなつて」

フシギな扉へと飛び込んだぼくたちを待っていたのは、真っ暗で柔らかな空間だった。どうやらどこかの衣服が大量に詰め込まれたクローゼットにつながったみたいだ。

なんとかコートをかき分け出口を探そうとするのだけど、よっほど広いクローゼットなのかなかなか明かりは見えてこない。

「ダレか明かり〜」

「あ、ちょっと待って。これかもしれない。」

ぼくの手のひらに何か固いものが当たり、思いっきり押し開けると

「……うわあああ!」「」「」

まるでなだれに巻き込まれたかのように、ぼくたち3人はコートにまみれてクローゼットから流れ出た。うっう、あごぶつけた。

立ち上がってみると、そこはとても変わった部屋だった。どうやら応接間のように、深い緋色のソファが机をはさんで向かい合わせに置かれている。

そのセットだけならまだまともな部屋なのだけど、部屋中に妙なオブジェと言うか魔導器がところせましと置かれていたのだ。

「こりやまた……ずいぶん趣味にあふれた部屋ねえ。」

青と緑と赤の水晶球がゆったりと上下する筒の前に立ったぼくは、首をひねってその向こう側を覗き込む。そこには鏡が1枚かけられていて、覗き込んだ瞬間、向こう側のぼくがベーツと舌を出してケ

タケタと笑いだした。な、何に使ったよアレ……。

「すげー！ ここにある物つかえば、この学校中をひっくり返すくらいイタズラできるぜ！」

「しなくてよろしい！」

瞳を輝かせ始めるかなでに釘を刺してから、辺りの……まるで水のようにすべらかなコート山の山を見下ろす。クローゼットから流れ出たそれは、部屋中の隅まで広がっていた。

「あーあー、部屋がぐちよぐちだよ。どうしよう。」

「押し込めば良いだけの話よ。良い？ セーのっ」

つづりちゃんの合図と共に、ぼくたちは一斉に部屋の隅からコートを押し始める。ようやく収納しおえた頃には、汗だくになっていた。

「ふう、ようやく片付いたわね。」

「なんとかこれでバレずに済む」

ここでハタと気がついたぼくは部屋を見回す。

「どうしたの？」

「ここ……出口は？」

そう、ぴつちりと壁際に隙間無く置かれたオブジェたちがあるだけ、この部屋には窓も扉もなかったのだ。

その事実に向面したぼくらは、軽いパニック状態に陥った。

「ど、どーすんのよ、まさかまたこのクローゼットを開けてワープするしかないっていの？」

「でも、そうしたらまたコートが流れ出ちゃうよっ」

「そうでもしなきゃ、アタシたち閉じ込められたも同然じゃない。」

「えええ〜っ」

キミもなんかアイディア出してよ と、かなでの方を見たぼくはギョツとして目を見張る。その腰から上半分が、さきほどの笑い出す鏡に埋まって向こう側に行ってしまうっていたのだ。

「ぎゃー！ かなでがそっちの世界にー！」

「つむぎ……それちよっと御幣があるわよ……。」

「いやーんどキドキ初体験。」

いつもどおりのおちゃらけ声と共にかなでが体を引き戻すと、その胴体はキチンとつながっていた。

驚いて駆け寄ると、鏡の表面が波紋を打ったように波打っている。おそろおそろ指をつっこむと、ちやぷんと言っ音と共に手首まで埋まりズブズブとさらに引き込もうとしてきた。

「ひゃ、どうなってるの？ これ」

少し抵抗して引き戻すと、難なく手首は戻ってくる。手を握って開いてみても特におかしいところはない。

その様子を見届けたつづりちゃんは、腕を組みフンツと気合を入れてから、堂々と宣言した。

「どういう仕組みでも良いわ。行くわよ」

「ええっ!？」

「ここで立ち往生していても時間の無駄じゃない。夕飯の時間に間に合わないわよ。」

それはいやだ。いやだけど！

「でもどこにつながってるか分かったもんじゃないよっ」

「はいここでドーン！」

バンツ

「うわあああ!？」

とつぜん後ろで爆発が起こり、ぼくたち3人は問答無用で鏡の中に倒れこんだ。べちゃっと床に投げ出されてから、怒鳴り声をあげる。

「かなでーッ！ 爆破魔法を至近距離で使っちゃって、いつも言ってるだろー！」

「てへ、ごめん。」

可愛らしく舌を出すバカの頭をひとつはたいて、ようやく体を起こそうと力を入れる。

「ところでここはどこ」

そこでようやくよくぼくは、目の前に黒い人物が居ることに気がつい

た。わなわなと震え、今にも爆発しそうな 委員長だ。

「きさまら、こんな、ところで、いったい、なにを、やっている？」

「こ、こんなところ？」

妙に単語でくぎってしゃべる委員長に言われ、ぼくたちは辺りを見回す。

さっきまで居た開かずの応接間とよく似た雰囲気だけど、それよりも広くてすこしは片付いている。中央に置かれた大きな机がドーンと占拠するその部屋は

「校長室だッ！！」

そりゃぼくたちは校長室へ行つたいろはちゃんたちを追つたのだから、当然ここについたのはそう言う意味では成功なのであって、でも本当はバレないようにこっそりと覗くのが目的だったのであって……。

「いいんちよおお！！ もう限界だよ〜」

「体罰で訴えるわよ、エセ正義者！」

「やかましい！ 当然の罰だと思えっ」

すでに数十分正座をさせられているぼくたちの足は限界に近かった。も、もう感覚がないよ……二度と立てないんじゃないの？ これ

「……アンタなんともないの？」

息もたえだえのつづりちゃんが、一人涼しい顔をしているかなでに問いかける。と、こちらに振り返ったヤツはにやあと笑って指を振った。

「こつという時の魔法デシヨ」

「あつ、かなでずるい！」

「貴様あ！」

どうやら空気のクッションをつくって足の間に入れていたらしいかなでは、必殺の委員長チョップでスパーンとはたかれる。

それからしばらくして、ようやく許されたぼくたちは床にへばり

きつてダれていた。

「も、だめ。」

「同じチームメイトによくやるわ……。」

「同じチームだからこそ、だ。身内に厳しく他人に優しくは私の信条だからな。」

「チツ、人道者きどりが……。」

カチャ

「お？ 何事じゃ」

屍になったぼくらを見計らったかのように、奥の部屋からいろはちゃんを伴った幼女、もとい校長先生とヒノエ先生が現れる。

彼女たちはぼくたち3人を見ると驚いたかのように一瞬とまどう。そこにすかさず委員長が提言をした。

「お疲れ様です。コイツらは不当に侵入しようとしたネズミどもですが、すでに十分罰は与えておきました。」

「何があつたかは……想像に固くないわね。」

悟つたらしいヒノエ先生が、ハーツと長いため息をこぼす。

その横でカラカラと笑った校長が、相変わらずのしゃがれ声で話し出した。

「よい、よい。どうせおんしらも呼び寄せるつもりだったのだ。手間が省けたと考えるべきであろう。」

「え？」

「アタシたちを……ですか？」

「ぎゃんっ」

ちなみに最後のは立ち上がろうとして失敗したかなでの断末魔。

ああブザマ……ああならないように気をつけて、っと。

よろよろとようやく立ち上がったぼくたちに、校長先生はニマあとと笑う。

「3組のたんぽぽ組か。まあ個性的なメンバーがよくも集まったもんじゃ。」

「たんぽぽ……組い？」

なにやらものすごく平和なチーム名が聞こえたような気がして、
ぼくらは顔を見合わせ　とりわけリーダー格である委員長を見つ
める。

「委員長、たんぼぼ組って」

「わっ、私は知らんぞ！」

あせったように否定する委員長の横で、ヒノエ先生が腕を組みな
がら話し出す。

「チーム名はこちらで振ってるのよ。他も似たようなものだから安
心なさい。」

「む、なんじゃ。それではまるでワシが付けたチーム名に不満があ
るようではないか。」

「そう聞こえたなら失礼。」

チーム名に関しては先生もぼくたち同じ気持ちなのか、どこか遠
い目をする。たんぼぼ組、たんぼぼ組かあ……。

その場の雰囲気を変えるようにおほんとか咳払いした校長先生は、
左右色違いの目でぼくたちを順番に見回した。

「多才な式使いひびき。入試実技トップのかなで。砂漠の民の秘蔵
つ子つづり。虹色使いいろは。そして、純血の音式魔法つむぎ。」

「！」

「こつも色濃いメンバーが自然と集まるとは、因果かのう……。」「
ほつつと吐息をついた校長は、ふいにキリツと表情を引き締めた
かと思うとこつ忠告をしたのだった。

「良いか、おんしらには期待をしている。じゃが、くれぐれも気を
抜いたりすることのないようにな。」

「……………」

「出る杭は打たれる。覚えておくことじゃ」

「結局、校長は何を言いたかったんでしょおか」

校長室から帰る途中、無言だったみんなの雰囲気を変えるように、

いろはちゃんは言った。

同じことを思っていたばくも、応えるように続ける。

「そうなんだよね、チームを組んだとしても、結局他のチームとやることは一緒でしょ？ ダレが杭なんて打つの？」

「優秀な魔導師となることの、何がいけないと言っただけ……？」

ブツブツと呟きながら考え込んでしまう委員長が、一番深刻に考えているようだった。

ところが残りの二人は生来の気質なのか、明るくこう言っただけ。

「まあまあ、考えたってしかたねーよ。オレたちが悩んだところでトラブルは向こうからやってくるのさ。」

「トラブル呼び込んでるのはアンタな気もするけど……アタシも概ねその意見に賛成ね。考え込んだって仕方ないじゃない。」

まあ、そう言われてみればそうだね。校長先生も、わざわざこれから学ぼうって時に水を差すようなこと言わなくても良いと思うんだけど。

ふとさきほどの校長の言葉をリピートしていたばくは、あることに気がついていろはちゃんの方を向く。

「ねえ、いろはちゃんは色式使いなんだね。」

「ええ、僭越ながらそう名乗らせて頂いております。」

「それじゃあ校長が言った『虹色使い』って何？」

そう聞くと彼女は実際にごらんに入れますよと、右手を前にかざし魔具を呼び出した。

「/color！」

白い光が集まり、彼女の手にはさきほど飛んできた時に乗っていた絵筆が現れる。パシッと掴んだ彼女は、悩ましげな体を盛大に揺らしながら空中に絵を描き始めた。

「えい、やあ、それっ」

もつすでに暗くなった回廊に、いろはちゃんが動かす筆の軌跡に沿って様々な色の魔力塗料が光を帯びる。

3分くらい描いた後、軽く汗をかいた彼女は振り返ってニッコリと笑った。

「できましたあ。」

「へ？」

虹色の光跡は、しばらくたつと端から消えてしまうので、今は何の痕跡も残さない廊下がそこにあるだけだった。これが……色式魔法？

「ちよつとどういうこと？ まさか今踊ったのが魔法だとか言うんじゃないでしょうね。」

「違いますよお、それじゃあ踊式じゃないですか。」

「なんでも良いが私は疲れた。先に帰らせてもらっぞ。」

「あ、委員長さん」

どこか疲れた様子の委員長が、そう言って一歩踏み出した時、悲劇は起こった。

突然空気を引き裂くような音が鳴り響き、炸裂した雷が委員長を襲ったのだ。奇襲はそれではとどまらずに、炎・氷・風などありとあらゆる攻撃魔法が、まるでポロ布のようにあっちこち跳ね回る委員長の体に襲い掛かる。

「すげえ……」

「う、うわあ！ 委員長っ！？」

さすがのかなでも、この時ばかりは引いたようにその光景を見つめ、ぼくはと言えばどうすることもできず一方的な拷問が終わるのを待つことしかできなかった。

悲劇は何の前触れもなく唐突に止み、委員長はかるうじて防御魔法を使っていたのか、ギリギリ生還した。

「あの、大丈夫ですかあ？ 人の話を聞かずに行ってしまうからですよ」

「いいいいろは……お前なにをした。」

「ですからあ、色式魔法をお見せしたまでですよ。」

ここでポンと一つ手を叩いたつづりちゃんは、思い出したと小さ

く眩く。

「色式つてのはすごく持続性があるって聞いたことがあるわ。つまりワナとか時間差での攻撃にすごく特化した方式なのよね。」

「はい、その通りです。」

「その分、威力は低めになってしまっらしいんだけど、いろはの『虹色』を使えばその問題すらカバーできるってどこかしら。」

その推理にいるはちゃんはパチパチと無邪気に手を叩いた。

「大当たりです、つづりさん。頭良いんですね。」

「いやなに、ちょっと考えたらすぐ分かることよ。」

照れたように頭をかくつづりちゃんと賞賛を贈るいろはちゃん。

そんな和やかな光景をよそに、ぼくは盛大に叫んだ。

「良いから委員長医務室に運ぶの手伝ってよ!!」

どこから拾ったのか、木の枝で委員長をつついていたかなでは、ぼくの発言を聞いてそりゃムリだよ。と眩いた。

「だってこの廊下いっぱい張られた魔法陣、どうやって越えるの？」

「あ」「あ」「あー……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7517y/>

新規テキスト ドキュメント.txt

2011年11月22日23時54分発行